

夏目漱石

文壇の趨勢

文壇の趨勢

近ごろはだいぶ方々の雑誌から談話をしろくと責められて、頭ががらん胴になったから、当分品切れの看板でも懸^かけたいくらいに思っています。現に今日も一軒断りました。向後^{こうご}日本の文壇はどう変化するかなどという大問題はなかく^{わか}分りにくい。いわんや二三日まえまで『文学評論』の訂正をしていて、頭が痺^{しび}れたように疲れているから、さっそくに分別も浮びません。それに似寄った事を先^{せん}だつてごく簡略に「秀才文壇」の人に話し

てしまった。あいにくこの方面も種切れです。が、まあせつかくだから——いつお出いでになっても、私の談話がお役に立った試ためしがないようだから——詰つまらんことでも責任逃のがれに話しましょう。

私が小説を書きだしたのは、何年まえからかしかと覚えてもいないが、決して古くはない。見方によればごく近ごろであるといってもよろしい。しかるにわが文壇の潮流は非常に急なもので、私よりあとから、小説家として、世にあらわれ、また一般から作家として認められたものがだいぶある。今も続々出つつあるように思われる。

私は多忙な身だから、ほかの人の作を一々通読する暇がない。たて籠こんでくると、つい読み損そこなつて、それ切りにすることもあるが、できるだけは参考のため、研究のため、あるいは興味のため、目を通してみる。ところが年一年と日を経るに従って、みんな面白おもしろい。だんくゝ老熟の手腕が短編のうちに行き渡ってきたように思われる。妙な比較をするようだけれども近来日本の雑誌に出る創作物の価値は、英国の通俗雑誌に掲載せられる短編ものよりも、ずっと程度の高いものと自分は信じている。だから日本の文壇は前途多望、大いに樂觀すべき現象に

充ちていると思いません。

そこで今いったとおり新参の私のあとから、すでに四五人の新進作家が出るくらいだから、そのあとからもまた出てくるに違ちがない。現に出つゝあるんでしよう。また未来に出ようとして待ち構えている人もさだめて多いことだろうと思えます。してみるとこれ等の四五の新進作家——必ずしもこれ等の人に限る必要はないが——はまた新あたらしい競争者を得らるることと信ずる。

この競争者の出かたである。出かたに二たとおりのある。一つは自分の縄張なわばりうちへはいつてきて、似寄った武器と、

同種の兵法剣術で競争をやる。元来競争となるとたいていの場合には同種同類に限るようです。同種同類でないと、ほんとうの比較ができないからでもあるし、ひとつ、あいつを乗り越してやろうという時は、裏道があってもかえって気が付かないで、やっぱり当の敵の向うに見える本街道をあとを慕って走け出すのが心理的に普通な状態であります。すると同圏内で競争が起ります。この競争の刺激によって、作物がだんだん深さを増してくる。種類が同じだから深さ以外に競争の仕ようがないのであります。

今一つの競争は圏外に新手が出ることであります。これから新たに文壇に顔を出そうと機を覗ねらっている人、もしくはすでに打って出た人のうちで、今までのものとは径路を同じゅうすることを好まないことがないともかぎらない。これは今までの作物に飽き足らぬか、もしくは、おれはおれだからぜひ一派を立ててみせると自己の特色に自信を置くか、または世間の注意を惹ひくにはなにか異様な武者振むしやぶりを見せないと効力が少ないとか、いろいろの動機から起るだろうが、要するに模擬者でもなければ、同圏内の競争者でもない。すなわち圏外の敵である。こ

の種の競争者が出てくると、文壇の刺激は種類と種類の間に起る。種類が多ければ多いほど文壇は多趣多様になって、互に競り合が始まるわけである。

もしこの二種類の競争すなわち圏の内外に互に競争が同時に起るとすると、向後吾人の受くる作物は、この両個の刺激からして、在来のはますます在来の方向で深く発達したものの、新興のは新興の領分でき得るかぎりを開拓して変化を添えるようなものになる。もつとも圏外の競争が烈しくなると、圏内の競争は比較的穏かになる。また圏内の競争が烈しい時は、比較的圏外が平和で

ある。

圈内の競争が烈しくなるか、圏外の競争が烈しくなるか、どちらに傾くかは、読書界の傾向でだいぶ極められ
る問題であります。もし読書界が把住性はじゆうせいが強くつて、
在来の作物からなおあるものを予期しつゝあるあいだ
は、圈内の競争のほうが烈しい。また読書界が推移性に
支配されつゝあつて、なにか新発展を希望する場合には
圏外に優勢なものがあらわれ勝がちになる。もし読書界が両
分されて半々になるときは圈内圏外ともに相応の競争が
あつて、相応の読者を有するわけになります。私は実際

の作物にあたって、とかく評をすることをしない。したがって向後の読書界がどういう作物をどう歓迎するかもいえない。ただ形式ばかりの話ではなはだつまらないが、各自この形式を実地にあてはめて見たらいろくな鑑定ができるだろうと思う。

競争はとうてい免まぬがれない。また競争がなければ作物は進歩しない。今日の作物がこれまで進歩したのは作家の天分にもよるだろうけれども大部分は競争の賜物たまものだろうと考えます。英国の政党が立憲政治の始まった時から二派に分れている。あれは偶然のような必然のような歴

史を有しているが相互に相互を研究し啓発するという大原則を政治上にうまく応用したものであります。もつともこれは圏外の競争の意味である。そうして、日本の作物が輓近ばんきん四五年間にたいへん進歩したのは、まったくこの圏外の競争心の結果ではなからうかと思われる。

圏外の競争は一方において反発を意味している。けれどもその反発の裏には同化の芽を含んでいる。反発するということがすでに對者を知らねばできないことになる。對者を知るためには一種の研究をしなければならぬ。その研究をして反発し合っているうちに對者の立場

やら長所やらを自然と認めなければならぬようになる。その時にある程度の同化はどうしても起るべきはずである。文壇がこの期に達した時には混戦の状態に陥おちいる。混戦の状態に陥ると一騎打の競争よりほかになくなってしまう。日本の文壇がすでに混戦時代に達したか、あるいは達せんとしてつゝあるかは読者の判断に任せておきます。

いわゆる文明社会に住む人の特色はなんだと纏まとめていってごらんなさい。私にはこう見える。いわゆる文明社会に住む人は誰だれを捉つかまえてもたいてい同じである。教育

の程度、知識の範囲、その他いろいろの資格において、
ほゞ似通っている。だから誰かれの差別はない。皆同じ
である。が同時に一方から見ると文明社会に住む人ほど
個人主義なものはない。どこまでも我は我で通している。
人の威圧やら束縛をけっして肯^{うけが}わらない。信仰の点にお
いても、趣味の点においても、あらゆる意見においても、
かつて雷同付和の必要を認めない。また阿諛^{あゆげいごう}迎合の必要
を認めない。してみるといわゆる文明社会に生息してい
る人間ほど平等的なるものはなく、また個人的なるもの
はない。すでに平等的である以上は圏^{かく}を画して圈内圏外

の別を説く必要はない。英国の二大政党のごときは単に採決に便宜べんぎなる約束的の団隊と見倣みなして差支さしつかえない。またすでに個人的である以上はどこまでも自己の特色を自己の特色として保存する必要がある。

文壇の諸公をいわゆる文明社会に住む人と見倣せば、いきおいこの性質を具していなければならぬ。人間としてこの性質を帯びている以上は作物のうえにも早晚この性質を發揮するのが天下の趨勢すうせいである。いわゆる混戦時代が始まって、彼我ひが相通じ、しかも彼我相守り、自己の特色を失わざるとともに、同圈異圈の臭味を帯びざる

ようになった暁が、わが文壇の歴史に一段落を告げる時
ではなからうかと思ひます。

(明治四二・一・一「趣味」)

日本文学電子図書館

文壇の趨勢

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第5巻」角川書店
昭和42年10月10日 6版発行

日本文学電子図書館